



輪舞（ろん
ど）の森（未

kkamiyam

1

ロンドの森。人里離れた奥深い、緑の館。

そこでは何処より早くに冬が訪れ、そして一足遅く冬があける。

ほんの少しだけれども冬の長い、それだからこそ春の訪れが何処よりも素晴らしく感じられるところ。

森には種々様々な動物が群れ集い、互いに助け合って暮らしている。いずれは彼らも開拓の波に揉まれて消え去ってゆく運命にあるのかもしれないが、まだそのときは遠い未来のことだろう。ともあれ、今はまだ楽園と呼ぶに相応しいロンドの森である。

2

人里離れて、といったが、森のはずれには一軒だけ家屋がある。そして細い街道に沿った、池との間に挟まれたこの家には、一人の少女が住んでいる。

天気の良い日の午前中にこの街道を歩く人は、こじんまりとした二階建ての家の脇で畑仕事をしている彼女の姿を見かけることがあるかもしれない。またそれが昼過ぎであるならば画架と画布、そして筆やら絵の具やらの入った鞆を肩からさげた少女がちょうど家から出てくるところに行き会うことかもしれない。そしてそんなときに彼女は必ず、相手が見知らぬ者であっても元気一杯に挨拶をしてくることだろう。

そしてまた、雨や雪の日には、遠くからでも煙突から立ち昇る一筋の煙が見えるかもしれない。

3

ロンドの森に、冬がきた。

駆け足で通り過ぎた秋の後にやってくる長い冬。それはまた、少女にとって孤独な季節の始まりでもある。ひしひしと骨身に染みる寒さは表へ出ることをためらわせ、到底片道三時間もかかる村へなど行く気にもなれない。森の動物たちもあるものは冬眠し、またあるものはもっと暖かい場所へとその住処を移したりと、夏場に較べてその数もぐっと減る。

普段は滅多に他人と会う機会のない少女にとってはこの動物たちこそが友達なのであり、また話し相手でもある。なのに、その彼らの姿が殆ど見かけられなくなるということは、すなわち彼女にしてみれば独りぼっちになったも同然ということなのだ。

それでもほんの僅かではあるが、小鳥や貂などといった動物たちがが森に残り、この寂しい日々々に幾ばくかの変化を与えてくれるのであった。

ある朝のこと、少女はいつものように夜明け前に目を覚ました。あいも変わらぬ寒さが辺りを包み込んでいた。大体夏の間は習慣で早く起きてはいるものの、この時期になるとそれが習慣によるのものなのかそれとも寒さによるものなのかが、ともすれば判らなくなる。何はともあれ、早く起きるということには変わりはないのだが。

少女は寝床を抜け出すと、寝間着を脱ぎ捨て普段着に着替えた。元々は濃い群青色をしていたその下袴も、今ではすっかり色あせてしまっている。エプロンもまた然りで、それから上着をまとうのだが、これもまた一見して使い古されたものであることが良く判る。だからといってそれでみすぼらしく見えるといったことはなく、むしろいつも綺麗に洗濯されているので、少女が顔を洗って身支度を整え終わるとこざっぱりとした心地よい印象を与えることになる。そうして、どうにかこうにか身繕いが出来ると少女は少し長めの髪を後ろで縛って朝食の支度にとりかかる。といってもそれはごく些細なもので、ミルクが一杯にパンを一つ、後はその時々に応じてスープやシチューを煮込んだりする程度である。

かまどに火をたき、鍋を掛け終わるとそれが煮える間に娘はいったんコートを身につけ表に出て、家畜小屋へと向かう。山羊の世話をしなければならないからだ。

その日は夜の間にも雪が降ったのであろう、戸を開けると辺りは一面の銀世界となっていた。その冬初めての積雪。それはもう、膝くらいの深さまでに達していた。

雪をかき分けて小屋へとたどり着いたとき、戸の周りが微かに乱れていることに少女は気付かなかった。だから、重い戸を開けて小屋の中へと入り、まずは山羊の寝床の掃除をしようとして藁の間に若い男の寝そべっている姿を見つけたときに、もう少しで悲鳴を上げるところだった。

男はまるで、死んでいるかのように見えた。だが、そうでないことは時々上下するその胸からはっきりと見て取ることが出来た。

少女は最初の驚きが過ぎると、おそるおそる男に近付きそっと声をかけてみた。しかし、何も反応は返ってこなかった。今度はもう少し大きな声で呼びかけてみる。矢張り応えは返ってこない。

そこでとうとう、少女は思い切って若者の体に手をかけた。そうして気付いたことには、その男の体が酷く火照っているのだった。

改めて良く見れば、青年は全身に汗をかいて息づかいも酷く荒れていた。そうしてその口からは、時々苦しそうなうめき声が漏れてくる。彼が酷く熱が出ていることは明らかだった。

少女は慌てて男の肩に手をかけて、そのまま戸口のところまで運んで行ったがそこではたと気が付いて、彼をそっとその場に寝かせると小屋の片隅に立てかけてある櫓を運び出した。そしてその上に若者の身体を横たえると、櫓を引っ張り彼を家の中へと運び込み、ベッドに寝かせてやった。そうして暖炉に火を一杯に起こし、男の額に硬く絞った冷たいタオルをあてがうと、再び

いつもの仕事へと戻っていった。

6

暗く、重苦しい夢だった。身体が闇に吸い込まれて行くような、酷く不快な心地がした。

男はがばとベッドの上へと跳ね起きた。全身から吹き出した汗がその不快さをよりいっそう酷くする。彼は枕元にあったタオルをつかむと、それで体中の汗を拭き取った。そうして、見慣れぬ室内を改めて良く見直してみた。見慣れぬ？ そう、確かに今ここで彼が寝ているベッドも部屋も、全く身に覚えのない場所だった。これは一体全体どうしたことなのだろうか。

起き抜けのぼんやりとした頭が漸くすっきりとしてきたとき、彼はやっと何があったのかを思い出していた。

と、そのとき不意に扉が開くと、桶を抱えた少女が部屋の中へと入ってきた。彼女はベッドに腰掛けている男の姿を見るとちょっと立ち止まったが、すぐに彼のそばまで歩み寄ると、「身体はもう大丈夫でして？」と問いかけてきた。

「え、ええ。別に何とも……」と若者は応え、少女が桶から洗面器に水を注ぐのを見つめていたが、やがてそれが終わると「あの、貴女が僕をここまで？」と尋ねた。

「ええ、そうよ。貴方、納屋の中で倒れてらしたからここへ寝かせたんですの。」そして少女は男の側へと来ると彼の額に手を当てた。「熱は下がったみたいね。でも、どうしてあんな所でお休みになりましたの？ 一言声をかけて下さればよろしかったのに」

少女の言葉に、男は暫しの間窓の外を眺めていたが「真夜中にそんな非常識なことは出来ませんよ。」と言った。

「でも、おかげで風邪を引いてしまったのよ」少女は笑みを浮かべて言った。空になった桶を抱えて、彼女は部屋から出ていった。「気が付かれたのならば、お湯を持ってきますわ。それで身体をお拭きになって下さいな。それと食事も持ってこないと」

少女が行ってしまった後、男は再び外を眺めた。外では相も変わらず雪がしんしんと降っていた。

7

やがて運ばれてきたお湯にタオルを浸して、男は全身の汗を拭った。それからこんなものしかありませんが、と少女の作ってくれたシチューを平らげた。「いや、本当に有り難う御座います。お陰で生き返りましたよ」これが食事の終わった若者の最初に言った言葉だった。そして、改めてこのような介護を受けたことに対する感謝の言葉を述べると、これ以上迷惑はかけられないからと家を出ていこうとした。が、少女はそれを遮った。まだ病気が完全に直っていないからと言うのがその理由であった。「それに、どのみちこの天気じゃ外へは出られないわ」

実際、窓の外は一段とその激しさを増していた。雪は深く降り積もり、頑強な者でもとてもそこを歩けるような状態ではなかった。ましてやつい先程まで熱にうなされていた青年など、到底

外に出られるはずもなかった。そこで、彼は少女に天気が回復するまでの間この家に滞在させてほしいと頼み込み、彼女はそれを快く承知したのだった。

8

青年がすっかり回復するまでには、それから更に数日の日にちが必要だった。その間、雪はいよいよ激しく降り積もり、外を出歩くことはますます困難になっていった。

「これじゃ、当分の間はここを出られそうにないわね」と、この頃までにはすっかり彼と打ち解けてきた少女が言った。青年はじっと腕組みをしながら窓の外を眺めていたが、それを聞くと洗面をしたまま頷いた。そんな彼の様子を知ってか知らずか、彼女は言葉を続けた。「でも良かった。今年の冬はこうしてお客様が訪ねてきて下さって」

それでふと若者は気付いたのだが、この家には少女の他に誰も住んでいる形跡がなかった。そこで、もしかしたら聞いてはいけないことだったのかもしれないのだったが、彼はそのことについて彼女に尋ねてみられずにはいられなかった。

少女は暫くの間彼に背を向けたまま暖炉を火箸でかき回していた。が、やがて男の方へと振り向くと、一人で暮らしているわけではない、と言った。そして、家族を紹介するからと言って外套を青年に手渡し、自分も一着身に纏うと表へと案内した。

外にはかなりの雪が積もっていたが、必要なところだけはしっかりと雪かきがされてあった。一つは納屋へと通じる道、そしてもう一つが、今少女が案内しているところで、それは家の裏手へと続いていた。

裏の池もすっかりと凍り付いて、湖面を歩くことすら出来そうである。実際、池の中程には小島があり少女は氷の上を歩いて男をそこまで連れていった。その小さな島の上も雪は綺麗に取り除かれ、そしてそこには三つの墓石が寄り添うように立ち並んでいた。

「私の両親と、そして弟よ」 少女はぽつりと言った。

若者は何と返事をしたらよいのか判らなかった。そんな彼の気持ちを察してか、彼女は明るい顔をして言葉を続けた。「もう、二年になるのかしら？ 時の移り変わるのって、早いものね。二年なんて、月日が経つのはあっという間。何だかもう、ずっと以前からここでこうやって暮らしていたような気がするわ」そして一言、つけ加えた。「本当……なんだから」

そのとき、少女の瞳からぽたりと水滴が落ちた。やがてそれは止めどもなく溢れ始め、堪えきれなくなった彼女はその場にうずくまって両手で顔を覆ってしまった。

時々嗚咽をあげながら震わしているその肩に、青年はそっと手をかけた。びくっとして彼のことを振り仰いだ少女は、慌てて涙を拭った。「はは、変ね。どうして涙なんか出るのかしら？」 「さ、もう家に戻ろう」 肩を抱いたまま、男は言った。少女はこくりと頷くと、彼に抱き抱えられるようにして家の中へと入っていった。

9

森に夜が訪れた。相も変わらず雪がちらつき、辺りは静まり返った闇に覆われる。ただ暖炉の勢い良く燃える音だけが、耳に聞こえてくる。

時折火に薪をくべる少女のことを、青年は黙って見つめていた。その姿からは、昼間彼女が泣いていたことなど想像も出来なかった。だが、赤く腫れた目がそのことを物語っていた。

自分は果たしてこのままここにいても良いのだろうか、と彼は考えていた。今日のように、またこの親切な少女に悲しいことを思い出させることにならないとは限らない。もう、体の調子は万全なのだからこれ以上この居心地の良い家に居座る理由はないのだった。

と、少女が一つ、大きく息を吐いた。それを合図に若者は立ち上がると、彼女に向かってお休みと声をかけると、そっと部屋を出て行った。

10

翌朝。

久方ぶりに空はからりと晴れ渡り、それが返って寒さをよりいっそう厳しいものにしていて。

青年は静かに寢床を抜け出すと、昨晚にまとめておいた荷物を手に取り、物音をたてないように階下へと降りていった。そして、玄関の戸を開けようとしたとき突然後ろから少女が声をかけてきた。

「朝御飯も食べないで、また行き倒れになるつもり？」 彼女はもうとっくに起きていたらしく、すっかりと身支度も整え終わっていた。

「随分と早く起きるんだね」と男はしどろもどろに言った。

「日の出る前には目を覚まさないかね」 少女は笑みを浮かべて言った。「でない、いい乳が搾れないわ」 事実、彼女は手にミルクの入った壺を抱えていた。「それより、どうするの。本当にこのまま出て行ってしまおうつもりなのかしら」

青年は暫くの間黙って考えていたようだったが、軽く頭を降るとコートを壁に掛けて食堂へと入っていった。そこには既に、二人分の食事が用意されていた。

二人は黙って黙々と朝食をとった。そしてついにその間中、口を聞くことはなかった。やがて食事が終わると、少女は外套を手に取り表へと出て行った。「さ、何をしているの。貴方も早くおいでなさいな」

男は意外そうな顔をして少女の後を追った。「何て顔をしてるのよ。村まで送ってあげるだけじゃない」 そう言いつつ、予め用意していた櫓を馬にくくりつける。青年は何も言わずに彼女と一緒に櫓に乗り込んだ。

11

馬の歩みは遅いとはいえ、時たま強く吹く風が身を切るほどに冷たかった。二人は何も喋らなかった。少女は手綱を握ることに集中し、青年は何か考えに浸っていた。

そうやって雪をかき分けて進むこと約半日、なだらかな斜面を登りきると眼下に村が見下ろ

せた。「さあ、着いたわ。ここからなら一人でも大丈夫でしょ」　そう言って少女は櫓を止めた。「さ、早く降りてよ」

「君は村まで行かないのかい？」と男はちょっと驚いて彼女に尋ねた。

「あたしは……別にいいわ」　少女は彼から目をそらして答えた。「早く家に帰らなきゃ。みんなが待ってるんですもの」

「みんなって？」　若者は少し眉をひそめて問いかけた。そしてすぐに続けて言った。「いや、何でもない」

そうして、二人はその場で別れた。

「気をつけて」と言った彼の言葉は、果たして少女の耳に届いたのだろうか。彼女は無言で馬車をめぐらすと、今きた道をゆっくりと戻っていった。青年はしばらくの間少女のことを見送っていたが、やがてあたりの寒さに身を震わすと、急ぎ足で村の中へと入っていった。

1 2

停車場の中は、ストーブに火が灯されていて快適だった。青年は町への切符を買うと、列車が来るまでの間に腹ごしらえをしておこうと、食堂へと足を運んだ。

食堂の中に一足踏み入ると、そこは人々の熱気で満ち溢れていた。そもそもこのような片田舎の食堂というものは、同時に酒場と宿屋も兼ねていることが多い。そして、特に何もすることがない真冬などには、真っ昼間からそこへ入り浸っているものなのだ。酒を飲むことが目的なのではない。ただ何とはなしに皆で集まって、話をしていることくらいしか娯楽がないのだ。

1 3

食堂にいた者たちは、戸の開く音にいっせいに振り返った。特にこれといった観光地でもない、ただの変哲なこの村に、真冬に訪れる物好きな青年のことをみんなはしばらくの間見つめていた。が、それも少しの間のこと、好奇の視線は収まって、すぐに店の中は雑談に興じる者たちの賑やかな声で満たされた。

青年は空いているカウンター席に腰を落ち着けると、軽く腹に溜まるものを注文した。

「お客さん、どっからきたんだね」

人の良さそうな店の　主人は、厨房に注文を伝えると青年に声をかけてきた。

「E……からですけど」と、青年はティーカップを口にはこびながら答えた。と、その言葉を聞いた客の一人が、赤ら顔をしたまま青年に近づいてきた。

「二人して、娘をかばったんじゃよ。娘はあのとおり、助かったさ。じゃが、二人はもろに馬に踏みつけられてな。父親は即死じゃったよ。そして、あの娘と母親は意識を失っておってな、母親のほうはひどく怪我をしておって、娘が気がついたときには、すでに亡くなっておったのじゃ

。わしは、あのときの娘の表情が、今でも忘れられんよ。何の感情も表わせなくなった、あの無表情というものをな。

それ以来、森の奥に引きこもってしまって、滅多なことでは人前には出てこないのじゃよ。